

三鉄・快走・5周年

宮古駅の朝、白に赤と青のストライプが入った鮮やかな車体が、春の日差しを浴びて到着した。2両編成の車体から、ドアが開くとどっと通勤、通学客がホームにあふれる。乗客たちは、急ぎ足で学校や職場に向かう。今年の4月で開業から5周年を迎えた三陸鉄道は、地域住民の通勤通学の足として確実に根づいている。

全国初の第三セクター鉄道として、昭和59年4月1日に開業した三陸鉄道の5年間の道のりは決して平坦ではなかった。開業当初は、赤字が6年間も続くという厳しい経営見通しがあったくらいだ。しかし、初年度に三鉄ブームによって2,600万円の黒字となって以来、今まで黒字が続いている。昨年は冷夏のため観光客が減り、経営的には苦しい状況にあるが、全社員あがっての徹底した合理的経営や各種イベント列車などの努力の成果で、三陸鉄道の快走が続いている。

三陸鉄道は、この5年間で三陸沿岸に文化・経済面で大きな影響を及ぼした。三鉄(株)専務堀龍明さんは「三陸鉄道の開業によって、ホテルなどの観光施設が充実してきましたし、街もきれいになりましたね。人の動きも活発になってきて、地場産業も賑わうようになってきています」と話す。

今、「さんりく・リアス・リゾート」構想という滞在型リゾート基地が整備されようとしている折、三陸鉄道の需要拡大に大きな可能性がある。三鉄が、地元住民の足として愛され、多くの観光客などにも利用されて、さらに快走が続くことを期待したいもの。

インタビュー

列車の本数をもう少し増やして—
阿部美香子さん(田老町)

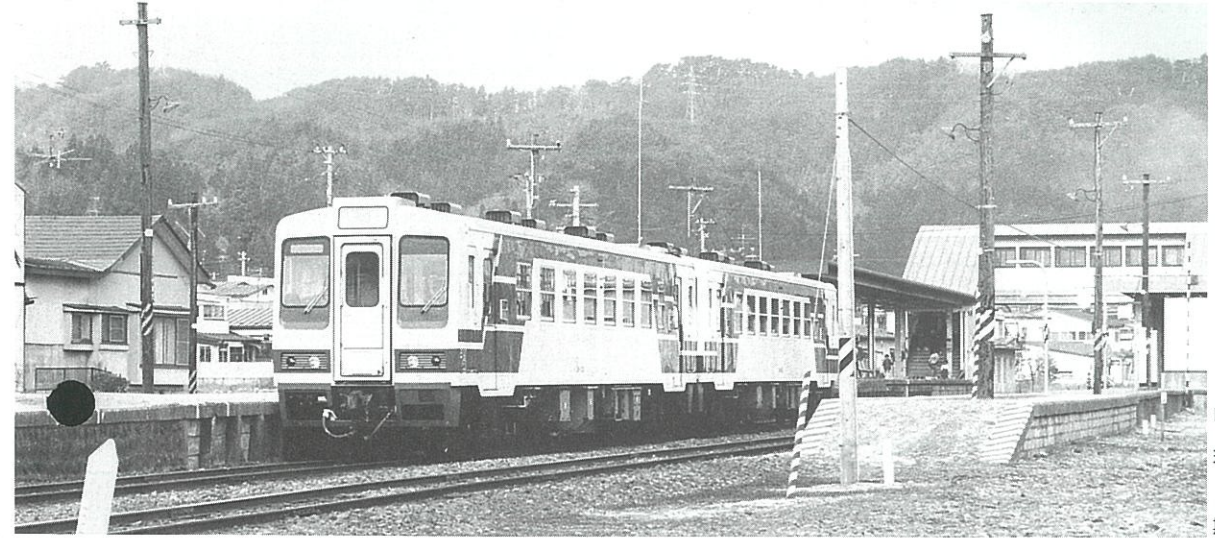
田老町から宮古市内に三陸鉄道で通勤しています。利用してから4年になりますが、バスより運賃が安いので助かります。ただ、もう少し列車の本数が増えれば良いと思いますが一応満足しています。三陸鉄道の一貫経営については、乗り換えによる不便がなくなるので、利用者にとっては早く実現してほしいですね。



運転席で遊ぶ木村智恵美ちゃん(宮古市)。三鉄が開業した日と同じ昭和59年4月1日生まれ。健やかに、大きく成長した智恵美ちゃんと同じく「三鉄も、もっと多くの人に利用されて、大きくなってほしいですね」と母親の恵美子さん。



三鉄本社(宮古市)に三鉄観光サービスを設け、旅行代理業務を行っている。若い女性に人気の海外旅行を売り込む職員。



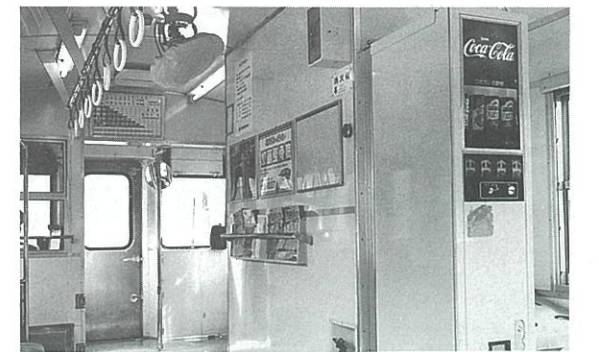
山田線走る三鉄の車両(JR陸中山田駅付近、山田町)。現在三鉄の車両が一日数本JR山田線(宮古~釜石)に乗り入れている。一貫経営の早期実現が望まれる。



夕方の車内で、買い物帰りの乗客に切符を切る車掌。三鉄の社員がまごころサービス。



カンパネラ田野畑駅。カンパネラは、宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」に登場する人物から命名された。



車両に清涼飲料水等の自動販売機や観光パンフレットを備えて、利用者の利便を図っている。テレビ付きの車両もある。



朝7時30分宮古駅着の列車。通勤・通学客がホームにあふれる。